

生物界最大の謎について

当社グループは、犬80万頭・猫30万頭、年間保険金請求件数450万件という世界最大規模の動物医療データを分析することで、犬・猫は、他の哺乳類と比較し、疾患発症における極めて重大な「謎」があることを明らかにしました。

我々はその謎に挑戦し、私たちに溢れんばかりの愛を注いでくれる彼ら彼女たちに応えとともに、「ずっと一緒にいたい」というすべての飼い主様の願いに応えていきます。

①「嘔吐・下痢・血便」が死因の上位に

犬の診療名別 死因ランキング(全犬種／診察日当日死亡ベース)

i. 全年齢 対象死亡解約:4,442頭				ii. 0-7歳 対象死亡解約:424頭				iii. 8歳以上 対象死亡解約:4,018頭			
順位	診療名	割合(%)	頭数	順位	診療名	割合(%)	頭数	順位	診療名	割合(%)	頭数
1	腫瘍性疾患	16.5	735	1	腫瘍性疾患	15.3	65	1	慢性腎臓病	17.1	686
2	慢性腎臓病	16.0	711	2	事故・交通事故含む	7.5	32	2	腫瘍性疾患	16.7	670
3	弁膜症	13.7	608	3	嘔吐・下痢・血便	7.1	30	3	弁膜症	14.8	594
4	元気喪失・食欲不振含む	6.6	293	4	慢性腎臓病	5.9	25	4	元気喪失・食欲不振含む	6.8	272
5	肺炎	5.2	233	5	元気喪失・食欲不振含む	5.0	21	5	肺炎	5.3	214
6	嘔吐・下痢・血便	5.2	231	6	肺炎	4.5	19	6	嘔吐・下痢・血便	5.0	201
7	肺炎	4.4	196	7	肺炎	4.2	18	7	肺炎	4.4	178
8	てんかん	3.3	148	8	熱中症	3.5	15	8	てんかん	3.4	135
9	胃炎・胃腸炎・腸炎	2.4	107	9	弁膜症	3.3	14	9	胃炎・胃腸炎・腸炎	2.4	95
10	糖尿病	1.8	81	10	てんかん	3.1	13	10	糖尿病	1.9	77

猫の診療名別 死因ランキング(全猫種／診察日当日死亡ベース)

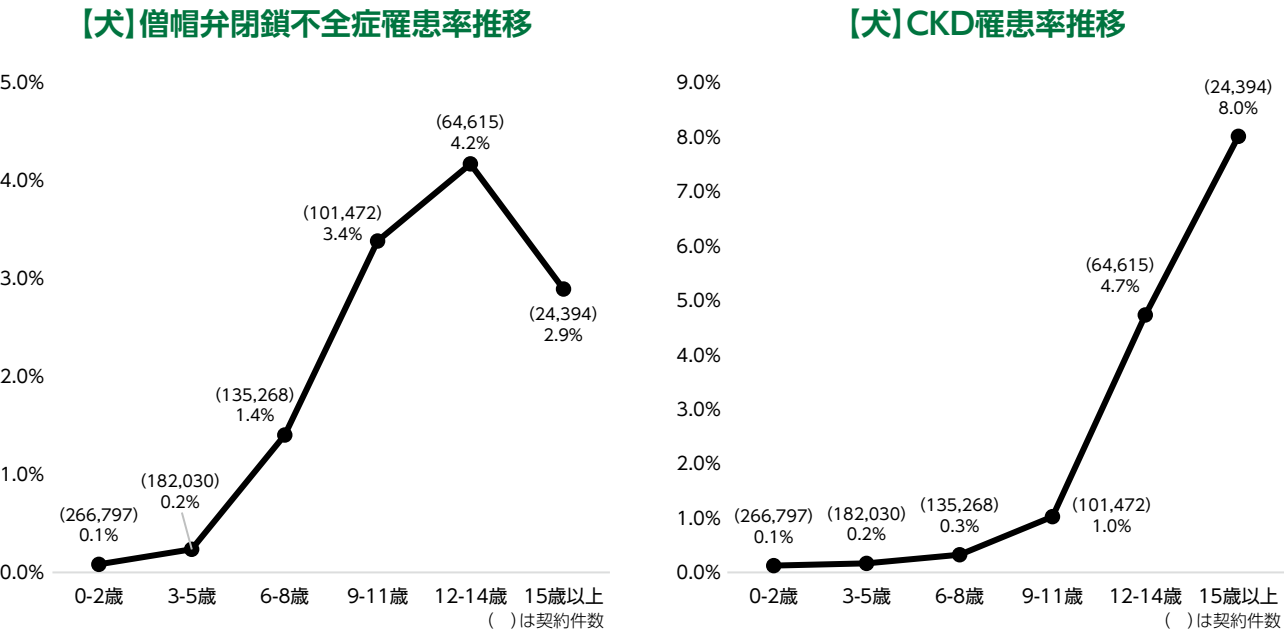
i. 全年齢 対象死亡解約:652頭				ii. 0-7歳 対象死亡解約:222頭				iii. 8歳以上 対象死亡解約:430頭			
順位	診療名	割合(%)	頭数	順位	診療名	割合(%)	頭数	順位	診療名	割合(%)	頭数
1	慢性腎臓病	26.1	170	1	心筋症	21.6	48	1	慢性腎臓病	31.4	135
2	腫瘍性疾患	13.8	90	2	慢性腎臓病	15.8	35	2	腫瘍性疾患	17.2	74
3	心筋症	12.0	78	3	猫伝染性腹膜炎・FIP	13.5	30	3	心筋症	7.0	30
4	元気喪失・食欲不振含む	7.2	47	4	元気喪失・食欲不振含む	8.1	18	4	元気喪失・食欲不振含む	6.7	29
5	猫伝染性腹膜炎・FIP	5.1	33	5	腫瘍性疾患	7.2	16	5	糖尿病	4.7	20
6	嘔吐・下痢・血便	3.5	23	6	肺炎	3.6	8	6	嘔吐・下痢・血便	4.0	17
7	糖尿病	3.2	21	7	弁膜症	3.2	7	7	弁膜症	3.0	13
8	弁膜症	3.1	20	8	消化管内異物・誤飲	2.7	6	8	肺炎	2.3	10
9	肺炎	2.8	18	9	嘔吐・下痢・血便	2.7	6	9	肺炎	2.3	10
10	肺炎	1.7	11	10	事故・交通事故含む	2.3	5	10	てんかん	1.4	6

通常、死因にならない「嘔吐・下痢・血便」が、実際には診察日当日ベースの死因にて上位を占めています。これらは、明確な臨床症状ですが、それに対応する明確な臨床検査所見が得られていない症例が多数存在しています。

すなわち、生命の維持基盤は整っていたものの、免疫応答が見られていなかったと考えています。

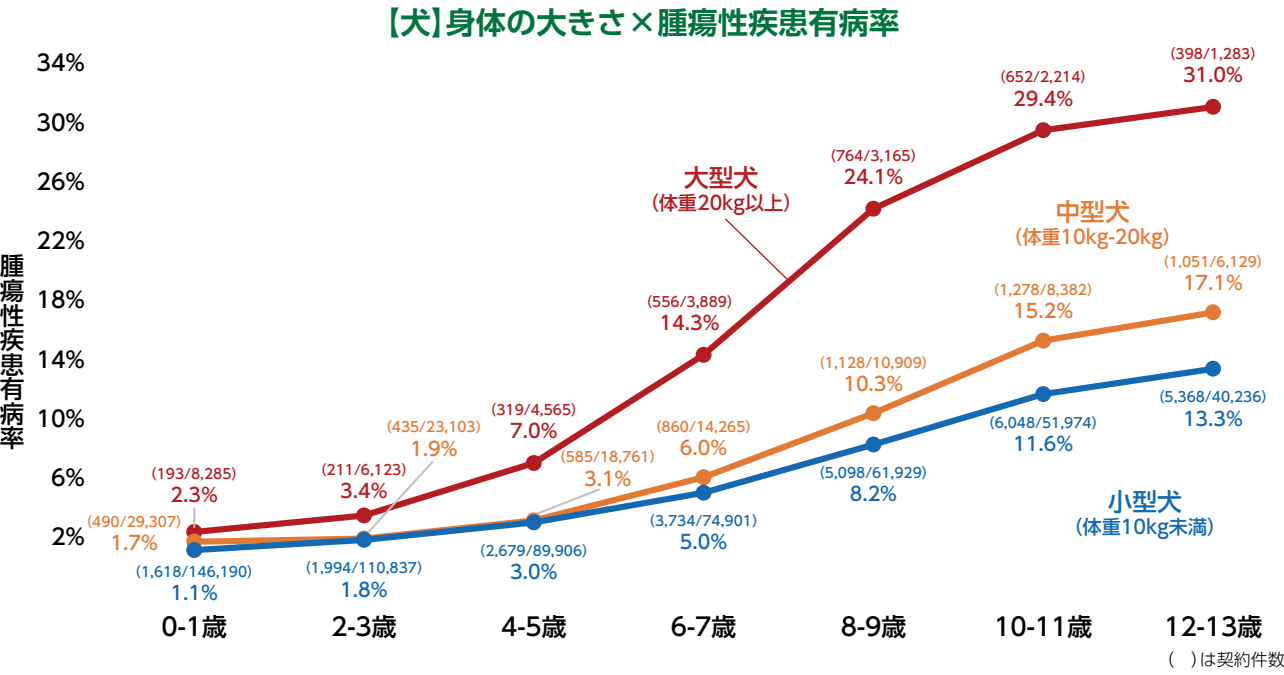
②若齢から生活習慣病を発症

犬・猫は、がんや僧帽弁閉鎖不全症、CKDといった、(ヒトでいう)生活習慣病に極めて若齢から罹患します。ヒトと異なり、飲酒や喫煙、過度なストレスは考えづらく、また、食生活は総合栄養食を基本とするため、栄養の偏り等による発症も考えにくいところです。加えて、混血でも多く発症しており、遺伝要因だけで説明することは困難です。



③腫瘍性疾患が体重比例で発症

がんについては、ゾウやクジラのような巨大な動物ほど、細胞数が多いにもかかわらず発症が極めて少ないことが知られており、これは「ピートのパラドックス」として知られています。一方で、犬・猫においては大型ほど発症が見られており、これは大型であるほど高度ながん抑制機構を進化させてきた哺乳類において、極めて特異な現象といえます。



背景事象

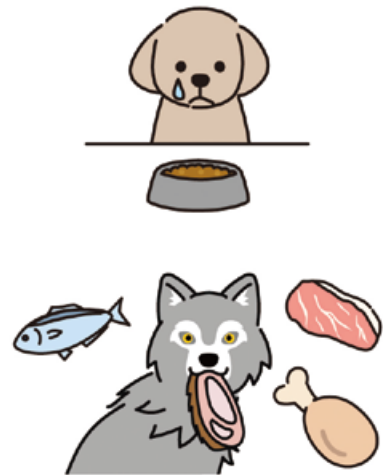
①先進国の犬・猫に特有の単調な高加工度食品摂取習慣

現代の犬・猫は先進国特有の毎日単調な高加工度食品摂取により、多様な自然抗原との接触機会が減少し、獲得免疫の健全な成熟に影響を与えている可能性があります。腸内細菌叢は、皮膚や免疫に関連する栄養素の産生に関与していると考えられており、その多様性低下は、免疫機能および免疫記憶や健康維持に影響を及ぼす可能性があります。

実際に、先進国の動物園におけるイヌ科・ネコ科の動物で、高加工度食品のみの給餌はほとんど見られていません。例えば米国のサンディエゴ動物園や英国のロンドン動物園では、多様な生肉や野菜・果物が給餌されており、健康維持のためには、多様な食事が当たり前とされています。

参考文献:

- [1] Szabo D, Lowe D. Feeding the Roar, Part I. San Diego ZooWildlife Alliance blog. 2016.
- [2] Kleinlugtenbelt P. Large Carnivore Husbandry in European Zoos.Univ. of Zurich; 2023.
- [3] Fletchall NB et al. Maned Wolf Husbandry Manual. AZA; 2007.
- [4] Nijboer J. Nutrition in Zoo Carnivores. Merck Veterinary Manual; 2020.
- [5] Mrs Apis Mellifera. ZSL London Zoo"Keeper for a Day": dreams do come true. 2012.

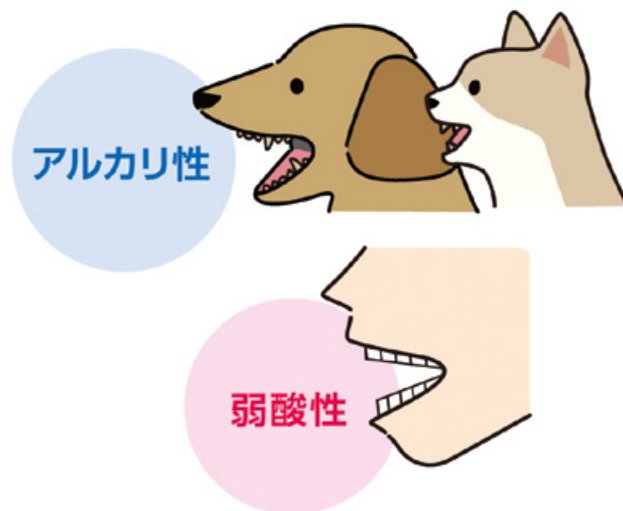


②不十分な口腔ケアによる歯周病の蔓延

ヒトの口腔内は酸性で、犬・猫の口腔内はアルカリ性と真逆になっています。アルカリ性の場合、石灰化が進みやすく、犬・猫では24時間でプラークが形成され、数日で歯石化してしまいます。

犬・猫は口腔内の抗菌ペプチド「リゾチーム」が少なく、さらに、ヒトにおいて、歯周病は高齢期の疾患と誤解されてきたため、犬・猫における口腔ケアは遅れをとってきました。しかし、昔から「歯周病は万病のもと」と言われており、実際、当社グループの分析により、腸内細菌叢の多様性を低下させる要因のひとつとして、歯周病関連菌という“目に見えぬ侵略者”の存在が浮かび上がっています。

近年では、動物病院やペットショップ、ブリーダー、トリミングサロンなどでも、口腔内の健康が健康維持や疾患の治療に大切であることへの理解が広がりつつありますが、その普及は十分ではありません。



③獲得免疫未成熟症(仮称)

多細胞生物は生涯にわたる大規模な遺伝子変異を制限しており、その構造的な脆弱性を克服するために獲得免疫システムを常にバージョンアップさせる必要があります。しかし、この免疫システムの成熟(バージョンアップ)には、多様で有益な自然抗原との安全な接触が不可欠です。毎日単調な高加工度食品のみを摂取すると、多様な自然抗原との接触機会が減少し、結果として獲得免疫が十分に成熟せず、『獲得免疫未成熟症(仮称)』の発症要因のひとつとなる可能性があります。



～「疾患診断」から「免疫診断」へ～

多様な腸内細菌叢とは有効に機能している遺伝情報の宝庫と言い得ます。

- (i) 多細胞生物が進化の過程で獲得した、特定の細菌等に対する選択的免疫寛容等によって形成される多様な腸内細菌の存在は、免疫のバランス調整能の維持にも重要な役割を果たしています。
- (ii) さらに、腸内細菌叢の多様性は、結果として競争的排他環境を構築し、タンパク質分解菌を含む歯周病関連菌のような病原性細菌の生着・増殖を阻止し、我々の健康維持に大きく貢献しています。
- (iii) 獲得免疫が必要とする免疫情報である多様で有益な自然抗原情報の安全な受け渡しにも貢献し、宿主が情報戦に勝ち抜くための重要な役割を担っています。逆に、腸内細菌叢の多様性の低下は自然抗原情報不足を招き、情報戦における圧倒的な脆弱性を生み、感染症は勿論、がんとの情報戦においても勝率を低下させ得ます。

がん発症とは、免疫情報の獲得不足による情報制御の破綻の末に起こる、情報戦における敗戦を意味していた可能性があります。特に、がん化の深度が浅いがんの若齢発症等はその意味で、免疫情報不足による情報戦の敗北とも言い得ます。

これらの発症経路の背後には、「先進国の犬・猫特有の単調な高加工度食品摂取習慣」と「不十分な口腔ケアによる歯周病の蔓延」という共通した要因が存在しています。

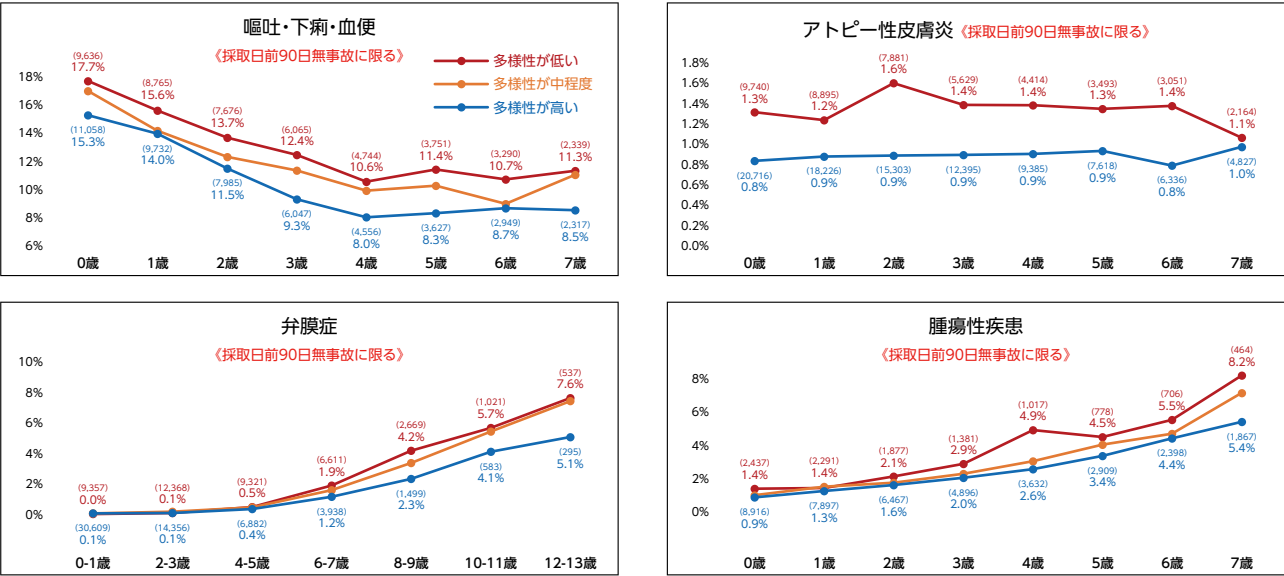
この2つの単純かつ根本的な問題が、免疫システムの慢性的な未成熟状態を引き起こし、結果として様々な疾患リスクを高める要因となっている可能性があります。

また、これらの新たな疾患モデルの知見は、犬・猫を超え、ヒトの健康管理や新たなヘルスケアモデルの基盤となる可能性があります。

統計的事実と原因仮説

①腸内細菌叢の多様性と疾患との相関

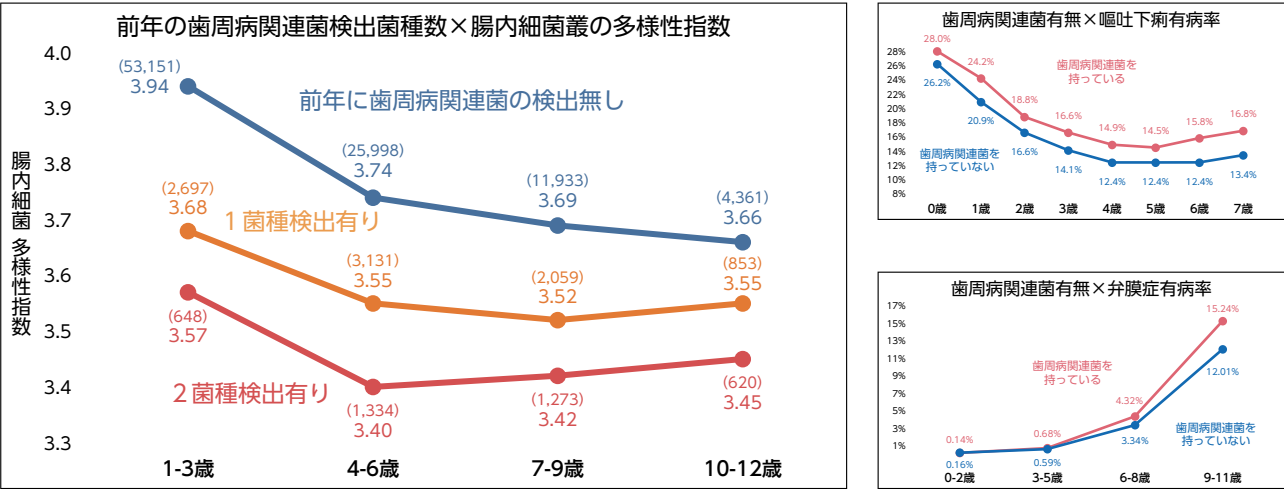
毎日単調な高加工度食品を摂取することにより、腸内細菌叢の多様性が低下し、競争的排他環境が破綻することで、消化管を中心とした慢性微小炎症を引き起こす可能性があります。実際に、保険金請求データと、犬60万検体・猫22万検体以上の腸内細菌叢データを分析したところ、極めて広範な疾患において、多様性との相関が見られました。



■条件：どうぶつ健生活を2018年12月～2023年12月に実施した犬の契約のうち、2021年3月～2023年12月に始期を迎える契約が対象。
※契約件数が1,000件以上ある品種に限る

②歯周病関連菌による影響

すべての年齢帯で、歯周病関連菌の検出有り群では腸内細菌叢の多様性が低下しています。さらに、検出された叢種数が増えるほどその低下が顕著です。実際に、歯周病関連菌の有無は、嘔吐・下痢をはじめとした基礎的疾患だけでなく、弁膜症や慢性腎臓病、さらには腫瘍性疾患といった発展的な疾患とも関連が見られました。これらの結果から、歯周病関連菌は腸内環境に対する「静かな侵略者」であるといっても過言ではないと考えられます。



■条件：どうぶつ健生活を2018年12月～2023年12月に実施した犬の契約のうち、2021年3月～2023年12月に始期を迎える契約が対象。
■歯周病関連菌：アニコム損保の保険金請求データとどうぶつ健生活のデータを照らし、歯周病罹患と関係があると考えられる細菌20種。

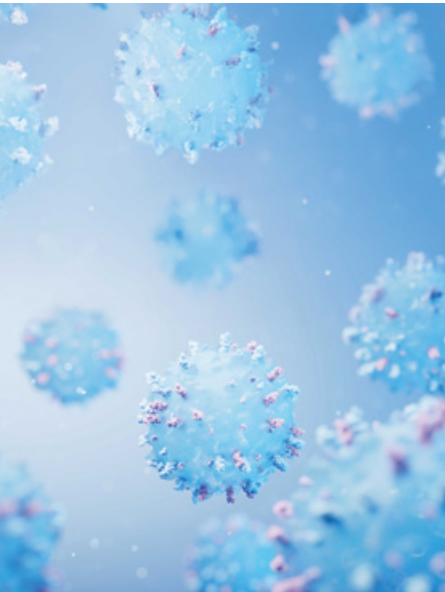
③ワープ型がん発症理論 (Warp Carcinogenesis)

がんは、ヒトであれば高齢で発症することが一般的ですが、犬・猫においては極めて若齢から発症が見られます。

この謎について、前述した犬・猫をめぐる背景と統計的事実をもとに、犬・猫の若齢発症がんは「ランダム変異の蓄積」ではなく「遺伝子断片の突発的挿入によるWarp現象」と捉え、『ワープ型がん発症理論 (Warp carcinogenesis)』を新たに提唱します。

- (i) 腸管関連リンパ組織 (GALT) ではB細胞が自然抗原を取り込みます。
- (ii) 慢性微小炎症が継続すると、B細胞が細菌由来の遺伝子断片を取り込む可能性があります。(これは仮説であり、現在検証中の新しい概念であります。)
- (iii) 免疫システムが異常なB細胞増殖に対して過剰に反応し、比較的短期間で免疫機能の疲弊が起こる可能性があります。(同じく仮説であり、現在検証中です。)
- (iv) これら2つのワープ経路が活性化された場合、若齢期においてB細胞性リンパ腫が急激に発症する(ワープ型がん発症)可能性を仮説として提唱します。

*本理論は現在検証段階の新たな医学的仮説であり、既存の診断・治療法を否定するものではありません。また、この仮説をもとにした診断・治療法の提供は現段階では行っておりません。



手術支援ロボットとAIの活用

日本の医療技術は、その手術手技の精度や術者の経験において高い水準にあり、多くの国際的な評価を受けています。特に、日本のペットは小型の個体が多く、日本の獣医療は世界でも類を見ない繊細かつ高度な技術が研ぎ澄まされてきました。

この繊細かつ高度な技術を最大限に活かすべく「力覚フィードバック技術」を搭載した手術支援ロボットのさらなる発展とAI活用の推進により、日本から世界の医療発展を加速させていくとともに「ずっと一緒にいたい」というどうぶつを愛するすべての者の願いに応えていきます。



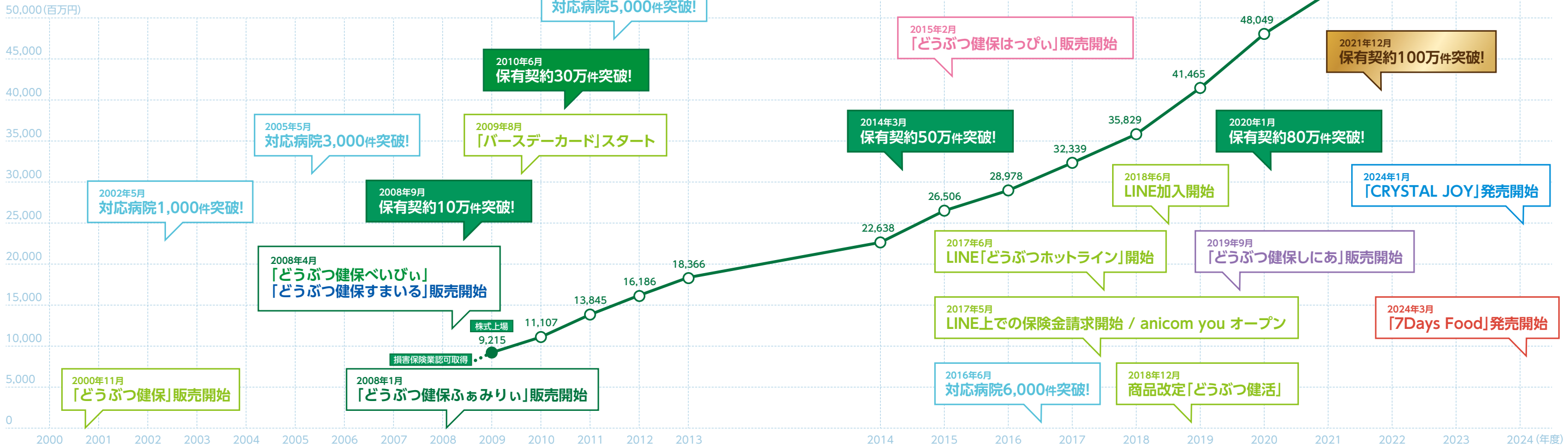
*画像はイメージです。

アニコム の歩み

「アニコム」という社名はラテン語で「命、魂」を意味する「anima」からとられた「ani」と「相互理解」を意味する「communication」の「com」を足し合わせ、「命あるものがお互いに理解し、共にひとつの目的に向かって力を合わせることで、これまで不可能とわられていたことが可能になる」という想いがこめられており、この想いが当社の事業活動の原点となっております。

創業の想いを脈々と継承しながら、時代の変化に合わせて自ら変革してきたことで、当社は持続的な成長を遂げてきました。お客様への付加価値の提供と変容する社会課題の解決を追求してきた結果が、現在のアニコムの強みに繋がっています。

■ 経常収益等成長の軌跡を表す指標



沿革

2000年 7月 (株)ピーエスピー設立 2004年 12月 アニコム パフェ (株) 設立 2005年 1月 (株)ピーエスピーから アニコム インターナショナル (株)に 社名変更 2月 アニコム フロンティア (株) 設立 6月 コールセンター開設 7月 近畿支店開設 10月 北海道支店開設 九州支店開設	2006年 1月 保険会社設立準備子会社アニコム インシュアランス プランニング (株) 設立 6月 anicom (動物健康促進クラブ) が 関東財務局へ特定保険業者の届出 8月 中部支店開設 2007年 12月 アニコム インシュアランス プランニング (株) からアニコム損害保険 (株)へ商号変更 保険持株会社の認可 損害保険業の免許を金融庁より取得	2008年 1月 アニコム損害保険 (株) 営業開始 6月 アニコム インターナショナル (株) から アニコム ホールディングス (株) に商号変更 2009年 1月 オンライン加入手続開始 4月 anicom (動物健康促進クラブ) が 関東財務局へ廃業届を提出 2010年 3月 アニコム ホールディングス (株) が 東証マザーズ上場	2014年 1月 現アニコム先進医療研究所 (株) 設立 5月 東北支店開設 6月 アニコム ホールディングス (株) が 東証1部に市場変更 10月 中四国支店開設 2015年 7月 アニコム キャピタル (株) 設立 9月 アニコム先進医療研究所 (株) の 横浜ラボ始動	2016年 4月 セルトラスト・アニマル・セラピューティクス (株) 設立 (アニコム ホールディングス (株) 49%、富士フイルム (株) 51%) 2017年 3月 Hong Kong Anicom Company Limited (香港愛你康有限公司) 設立 2020年 1月 (株) シムネット完全子会社化 2021年 3月 アニコム先進医療研究所 (株) がセルトラスト・ アニマル・セラピューティクス (株) から 再生医療事業を承継 アニコム キャピタル (株) の解散を決議	2022年 2月 Hong Kong Anicom Company Limited (香港愛你康有限公司) 子会社化 4月 東証の市場区分の見直しにより、プライム市場に移行 10月 アニコム パフェ (株) がアニコム フロンティア (株) を吸収合併 2024年 3月 (株) フローエンスの株式を取得し、連結子会社化
--	--	---	--	---	--

創業からの基礎固め期

第二期創業期

アニコムは2000年に日本初のペット保険会社として、「予防型保険会社」を作るという想いで創業しました。予防型保険を実現するためには、どんなペットがどんなケガや病気になったかというデータが必要です。そのため、創業からの基礎固め期においては、ペット保険の普及に向けた取組みを行ってきました。家族の証である健康保険証の発行や、その保険証を動物病院の窓口で提示することで保険金請求手続きが不要となる窓口精算システムの普及などの取組みにより、保有契約件数は2018年度末時点で75万件を突破するまでになりました。

2019年度からの第二期創業期においては、ペット保険のさらなる普及と進化を進めるとともに、保険事業以外のシナジー創出事業との相乗効果により、経済的価値と社会的価値を創造するCSV経営を目指しています。創業期に引き続き、ペット保険の普及に努めてきた結果、2024年度時点で保有契約件数は128万件、年間保険金請求件数は450万件を超えるまでに至りました。保険のビッグデータからケガや病気を分析することで、そもそも事故を起こさせない、健康をサポートする予防型保険会社グループへの取組みを加速させていきます。

アニコム事業展開

ペット保険事業

当社グループの中核事業であり、重点施策として「ペット保険のさらなる収益力向上」を位置付けています。保険商品の独自性・優位性の訴求や、販売チャネルの営業力強化などを通じて、さらなる収益拡大を目指すとともに、損害率改善や契約獲得コストの削減、オペレーション業務の改善により費用の削減を行い、収益力向上を目指します。

遺伝子検査事業

ブリーダーやペットショップに対して遺伝子検査を提供しています。子犬・子猫の遺伝病検査によって収益を得るとともに、遺伝病を撲滅していくことで保険金削減を狙います。さらに、一度に様々な項目を測定するパネル検査の開発・拡大を進め、繁殖効率向上などのブリーディングサポートの武器としていくことを目指します。

腸内細菌叢検査事業

どうぶつの健康チェックを目的とした腸内細菌叢検査を提供しています。保険の付帯サービスとして提供することによる保険の独自性追求や、整腸力・多様性との相関の分析によるフード事業への展開等を目指します。

健康イノベーション事業

ペット保険のビッグデータをもとに、ペットの健康維持に必要な口腔・腸内ケア商材の開発・販売を行っております。本事業自体での収益化と、健康サポートによる保険金削減を目指します。

動物病院事業

グループ病院の拡大・プレゼンス向上・AIを活用した高度動物医療の提供を通じた獣医療の標準化と、医療費抑制効果の発現を目指しています。そのため、今後も規模拡大が必要ですが、M&A結果に左右されるため、足元は規模拡大を狙いつつも、保険事業とのシナジー効果の発揮（保険契約者の送客先とするなど）のために有効活用していきます。

再生医療事業

治らない病気を治す再生医療を提供することで、収益とともに保険金削減を目指しています。収益化に向けては、①治療系（動物再生医療技術研究組合の活用）と、②予防系（健康度向上、特定疾患予防、アンチエイジングなどをグループ病院や関連会社等にて研究中）の2軸で事業を推進しています。

マッチングサービス事業

ブリーダーと飼い主候補をつなぐマッチングサイトを運営しています。マッチングサービス事業を通じて、理想の子犬・子猫を飼い主にお届けするとともに、保険、物販等を推奨することで、事業領域の拡大を目指します。

ブリーディング事業

環境エンリッチメントに配慮した子犬・子猫のブリーディング事業を行っています。食の品質や定期的な運動といった、日々の生活の質を重視したブリーディングを行うことで、元気で健康な子犬・子猫を飼い主にお届けします。

私たちアニコムグループでは、ペット保険事業において収集した膨大な疾病データをもとに、ペットの先天性疾患及び後天性疾患へのソリューションの提供を進めてきました。

具体的には、先天性疾患に対する遺伝病撲滅に向けた遺伝子検査事業のさらなる拡充、後天性疾患に対する口腔内環境および腸内環境と健康の関係性に対する調査・分析とこれに基づく健康ソリューションの開発・提供、これまで治らないとされていた疾病への新たな選択肢を提供する再生医療事業など、どうぶつの健康と幸福を支える様々な研究やサービス提供を行ってまいりました。

AIをはじめとする情報技術の発展をこれらの研究やサービスの提供に活かすことで、世の中に新たな価値を提供し、どうぶつの笑顔を増やし続けることを目指します。



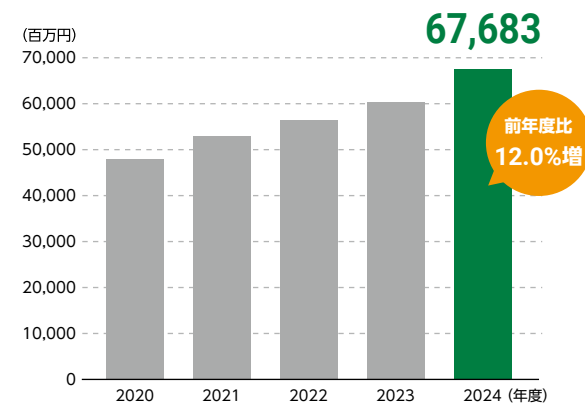
豊富なデータとデータ解析による
新たな価値創出

2030年度ビジョンの実現へ

どうぶつ業界における川上から川下までを
発展的に繋ぐインフラプレーヤーとして無限大の価値を社会に提供する

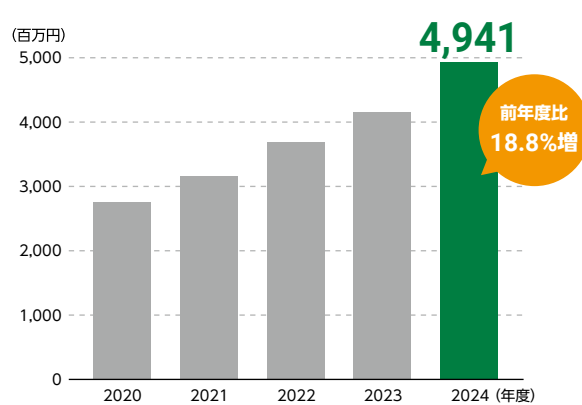
財務ハイライト

連結経常収益

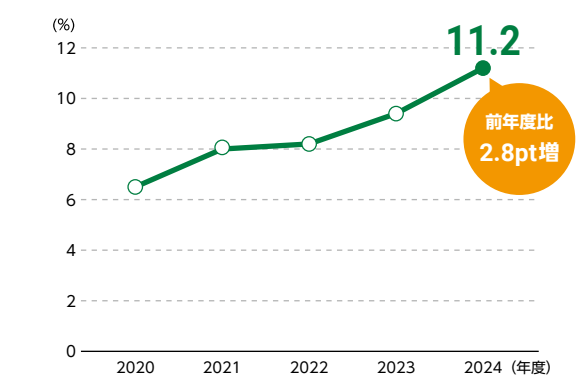


保険事業は、堅調なペット飼育需要と販売チャネル強化により、業績を順調に推移させました。インフレ影響を受けつつも、業務効率化とコスト削減により、保険事業のコスト効率は改善しました。また、シナジー創出事業の収益も順調に伸びており、これらの取り組みにより、安定した成長と企業価値向上が実現しました。

連結経常利益

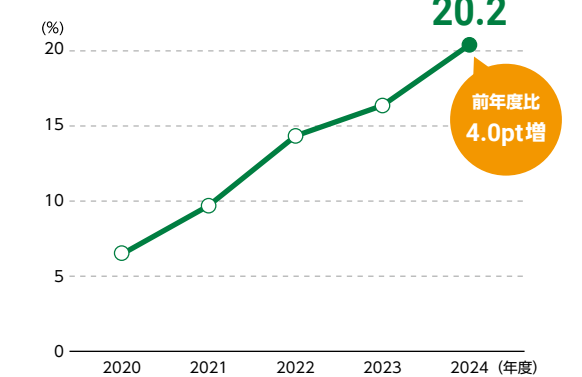


連結ROE



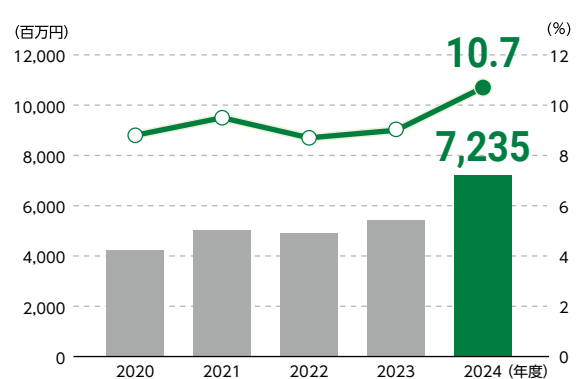
2024年度のROEは「中期経営計画2022-2024」の目標水準として掲げた10%を上回り、11.2%を達成しました。

配当性向



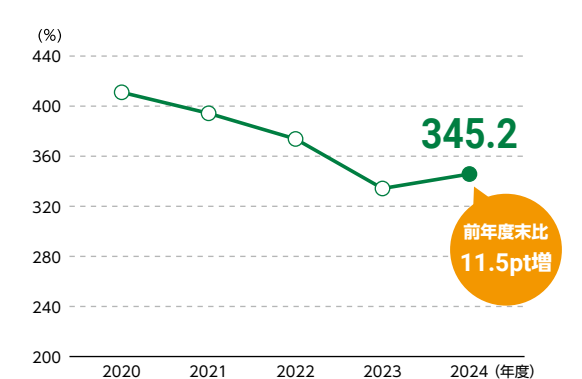
2024年度の配当性向は「中期経営計画2022-2024」の目標水準として掲げた20%を上回り、20.2%を達成しました。

シナジー創出事業 売上高・売上高比率



ペット保険事業とのシナジー関連のある事業の拡大を目指し、M&Aの実施等も含めた売上拡大を実現しています。

単体ソルベンシーマージン比率



中期的な保険の健全性に係る規制(リスク係数等)見直しの議論が進んでいる中、今後最適な資本構成を目指していきます。

非財務ハイライト

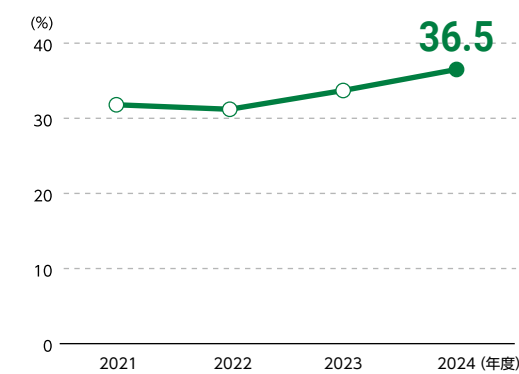
人

ジェンダーギャップの解消に向けて、積極的な女性管理職の登用や男性の育休取得の推進に取り組んでいます。

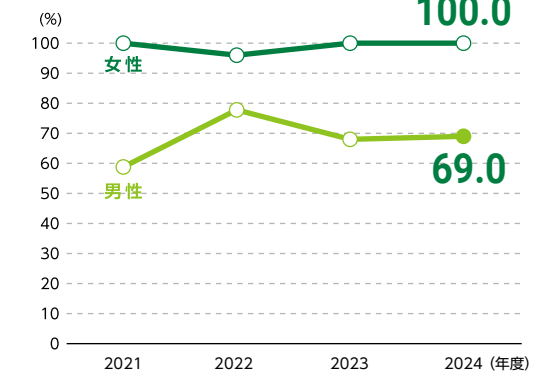
※1 算定対象は当社および連結子会社としています。

※2 管理職の定義は「部下を持つ職務以上の者、及び部下を持たなくともそれと同等の地位にある者」で「役員」を除きます。

管理職に占める女性割合



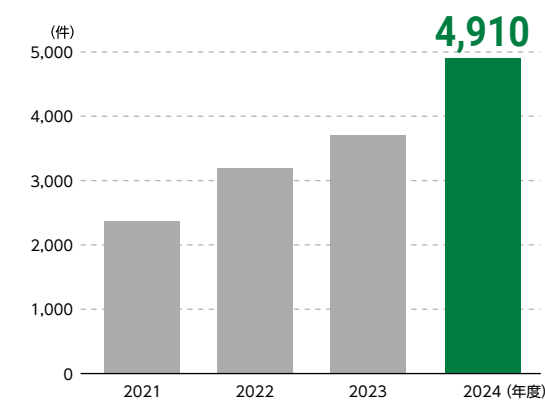
育休取得率(女性・男性)



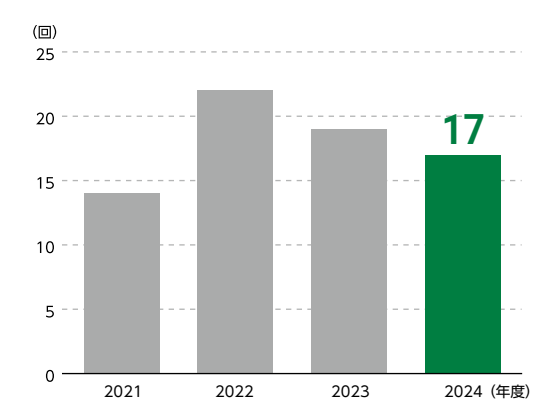
どうぶつ

ペット業界における課題である殺処分の解決に向けて、保護犬猫等の譲渡支援を行っています。

里親マッチングサイト「hugU」譲渡件数



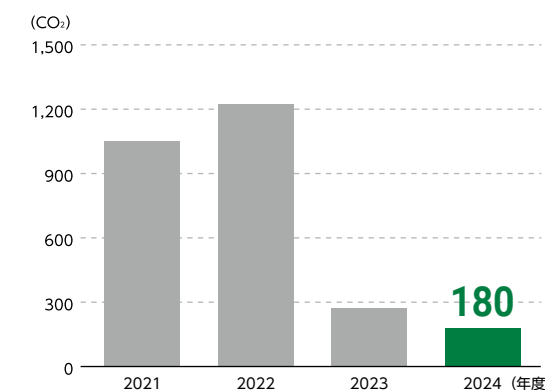
譲渡会支援回数



環境

カーボンニュートラルの実現に向けて、CO₂排出量の削減に取り組んでいきます。

Scope1+2排出量



※算定対象は当社および連結子会社としています。データ収集体制が整っていない一部の動物病院については、2022年度までは算定対象から除外、2023年度から病院規模別の平均排出量を算入しています。また、2024年度から連結子会社となった株式会社フローエンスについては、データ収集体制が整っていないため、算定対象から除いています。

※6.5ガスは算定対象外としています。

※環境省・経済産業省が公表する電気事業者ごとの「調整後排出係数」を用いて算出しています。

※2023年度は、非化石証書を購入することでScope2の再エネ比率100%を達成しました。

※2024年度は、再エネ由来電力の利用および非化石証書を購入することにより、また、社用車から出されたCO₂をJ-クレジットを活用して全量オフセットすることにより、カーボンニュートラルを達成しました。

価値創造プロセス

当社は、経営資源の投入と最適化を通じて、事業戦略を遂行し、社会課題の解決に向き合っています。継続的かつ持続的に価値創造が可能となるサイクルを構築し、ステークホルダーの皆様と好循環を生み出すことで、長期ビジョンの実現を目指します。

Philosophy 経営理念

ani+com=anicom アニコムグループは、それぞれの命が持つ個性の違いをお互いに尊重しあい、分業協力することで、世界中に「ありがとう」を拡大します。

Vision

2030年度ビジョン

どうぶつ業界における川上から川下までを発展的に繋ぐインフラプレーヤーとして無限大の価値を社会に提供する

強み

「アニコム」ブランドの信頼感

- ・保険契約継続率：88.2%
- ・獣医師相談、迷子捜索、オウンドメディアを通じた情報発信
- ・台湾東部沖地震・モロッコ大地震、リビア大洪水、ミャンマー大地震、ロサンゼルス山火事への募金・寄付

窓口精算システムによる 高い顧客利便性と業務効率

- ・対応動物病院数：6,964病院
- ・保険金請求のうち窓口精算の割合：87.4%

全国をカバーする営業力と豊富なチャネル

- ・ペットショップ/ブリーダー代理店数：4,986店舗
- ・一般代理店数：7,911店舗
- ・ブリーダー、ペットショップ、WEB代理店、保険会社、銀行、地域生協など

豊富なデータとデータ解析による 新たな価値創出

- ・年間450万件を超える保険金請求データ
- ・腸内フローラ測定申込数：約24万件
- ・遺伝子検査検体数：約6万件

多様な専門人材の積極的な登用

- ・獣医師免許保有者：103名
- ・医学/農学/理学/薬学博士、弁護士、公認会計士、アクチュアリー（保険数理士）、弁理士、デザイナーなど

外部環境

- ・コロナ禍における特需的な飼育需要は落ち着きを見せるが、引き続き堅調
- ・大手企業等の相次ぐペット保険業界への参入
- ・動愛法規制強化後、ブリーダーとペットショップの業態融合による流通革命の加速
- ・動物病院の通院頻度の増加と診療費単価の上昇

どうぶつの一生を豊かに健康にするための ビジネスモデル

どうぶつの

ライフステージ

生まれる前～お迎え



遺伝子

- ・遺伝子検査事業

交配 出産

- ・マッチングサイト
- ・精子バンク
- ・ブリーディング支援

ペットショップ

- ・しつけサービス提供
- ・遺伝子検査証明書の発行

生活



日々の暮らし

- ・フード開発と販売
- ・他企業との連携

健康診断

- ・腸内フローラ測定事業
- ・保険新サービス付帯

一次診療（一般診療）

- ・電子カルテ拡販
- ・予約送客事業
- ・一次動物病院運営

ペット保険

お別れ



二次診療（先進医療）

- ・再生医療提供
- ・二次動物病院運営

お別れ

- ・ペット霊園紹介
- ・終生飼育施設

社会的価値



- ・心と体の健康
- ・サプライチェーンの透明性の向上
- ・ペットの地位向上



- ・生きがいの提供
- ・地域活性化への貢献
- ・教育機会の公平化
- ・社会機能の強化
- ・健康とウェルビーイング



- ・環境負荷の低減
- ・生物多様性の保全

▶ P.47参照

社会的価値と
経済的価値の
両立を追求

経済的価値

- ・連結経常収益 **67,683**百万円
- ・連結経常利益 **4,941**百万円
- ・連結ROE **11.2%**
- ・株主還元 配当性向 **20.2%**
- ・シナジー創出事業 売上高・売上高比率 **10.7%**
- ・アニコム損保単体ソルベンシーマージン比率 **345.2%**

※2024年度末時点での数値を記載しています。

「予防」を軸としたグループ戦略の推進

生物は無限の環境の変化に対し有限の力で対抗してきました。すなわち、生物は交配により、生命の設計図とも言われるDNAの塩基配列(ATGC)を無限に組み合わせ、子どもに夢を託してきました。

世界最古の法典と言われるハンムラビ法典にも近親交配を禁ずる記載が存在するように、近親交配は太古の昔から、根源的な禁忌行為とされてきました。それにもかかわらず、人類は1万年もの間ペットに近親交配を強い続けてきました。その結果、ペットは遺伝的に脆弱な「一人で生きる力0%、愛し愛される力100%の愛の塊」となりました。

ブリーディングでの最適な交配を行うことにより、遺伝子等の先天的要因で発症する疾病の発症を避け得ようになりましたが、それでもペットの疾病をゼロにすることは難しく、後天的要因に起因する疾病の予防も重要な課題であると考えています。ペットは、若齢からがんを含むほぼすべての疾病にヒトよりも高確率で罹患します。ヒトでは疾病発症の原因として、食事、飲酒、喫煙、人間関係のストレス等様々な交絡因子が挙げられますが、ペットはヒトより強く食事の影響を受けています。

当社グループの研究で、犬の腸内細菌の多様性が低いほどすべての疾病の有病率が高いことが明らかになっていることから、「腸内細菌の多様性が『免疫力』の一部を構成する」と当社グループでは考えています。つまり、多様な食べ物を取り入れ、腸内細菌の多様性を維持・向上させることが「予防」のために重要な要素となります。また、歯周病に罹患すると、翌年の腸内細菌の多様性が低下することが明らかとなっています。「歯周病は万病の元」と言われるように、犬のすべての年齢ですべての疾病の有病率を引き上げていることは、口腔ケアが疾病予防にとって重要であることを示唆するものと考えます。

このように、当社グループでは、保険・医療に関するビッグデータの解析による「免疫の見える化」を通じた、がんを含むすべての疾病における発症原因の探求を進めます。また、歯周病予防による口腔ケアや腸内細菌の多様性向上による腸内ケアを推進することで、免疫力の向上を通じた様々な疾病に罹患するリスクを下げる健康ソリューションを提供いたします。予防を日常の中に位置付けることで重篤な疾病を避け、ペットの健康寿命の延伸を実現することを目指します。



獣医療の未来を創る。「JARVISどうぶつ医療センター Tokyo」開業迫る！

アニコム先進医療研究所株式会社は、ロボット手術を含む最先端の高度獣医療を提供する動物病院「JARVISどうぶつ医療センター Tokyo」を、2025年秋を目途に開業する予定となりました。

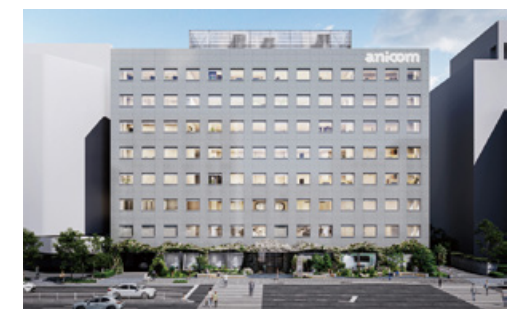
「JARVISどうぶつ医療センター Tokyo」は、最先端の高度獣医療を提供する動物病院であり、整形外科、脳外科、脊椎脊髄外科、心血管外科、軟部外科といった各種外科のほか、歯科、消化器内科、循環器内科、画像診断科、麻酔科、リハビリテーション科などあらゆる分野におけるスペシャリストが、どうぶつの診療にあたります。

また、同センターにおいては、手術支援ロボットを導入することで、繊細かつ高度な技術が研ぎ澄まされている日本の外科獣医療水準のさらなる高度化に貢献し、日本のみならず世界の獣医療発展を促進してまいります。当該取組みに関する研究・開発の一環として、2025年7月4日に日本で初めて*、手術支援ロボットを使用した犬の避妊手術に成功しました。

*日本初：2025年7月当社調べ



*画像はイメージです。



※画像の手術用ロボットは、研究用実験機です。

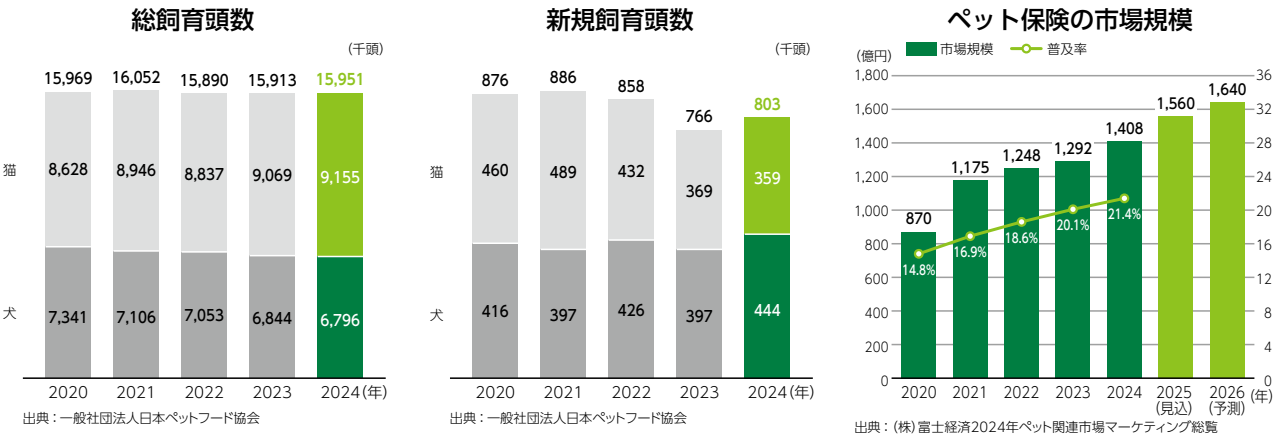
損害保険事業

経営環境および対処すべき課題

〈経営環境等〉

2024年のペット業界全般は、コロナ禍以降減少していた新規飼育頭数が下げ止まったことで、前年比約3万頭増の約80万頭となりました。一方、ペットの家族化の進展により健康管理を意識する飼い主が増えたことなどから、国内のペット保険市場の普及率は21.4%にまで伸長しています。

[犬・猫の飼育頭数の推移およびペット保険の市場規模]



その他、2024年度はペットの長寿化や動物医療の高度化、インフレによる医療費上昇が続き、ペット保険への関心がさらに高まる一方、競争激化や損害率上昇により、ネット型保険を中心に事業撤退が相次ぎ、合従連衡が進行しました。当社グループは、そのような環境変化も踏まえつつ、これまで培ってきたグループ全体のリソースすべてを用いて、ペット保険事業の経営効率向上、ひいてはペット業界全体の経営効率向上を目指していきたくと考えています。

保険事業

新規・保有契約の状況

新規契約獲得件数は年間で**24.5万件超**、四半期単位では**6.6万件で過去最高更新を継続**
2025年3月末の保有契約件数は**128万件**を突破

アクサダイレクトからの移管影響

2024年12月よりアクサダイレクトから移管開始
【当期影響】

決算期	移管契約数	移管手数料
2025年3月期 3Q	約0.3万件(実績)	約1.5億円(実績)
2025年3月期 4Q	約0.8万件(実績)	約4億円(実績)

商品・サービスの拡大

「どうぶつ健活」の堅調な増加が寄与し、
年間の継続率は**88.2%**と安定して高いレベルで推移

資産運用

環境認識(リスクと機会)

- 保険会社グループとしての財務健全性と収益の安定性を両立するため、資本市場のリスク(流動性リスク、金利リスク、価格変動リスク、不動産リスク、為替リスク、資産集中リスク)等をモニタリングし、年度の投資方針に基づき運用しています。
- 有価証券運用に関しては、当社事業が日本国内を中心とすることを踏まえ、日本国内の債券、株式等を中心としつつ、ROR(Return on Risk)の観点より、市場環境が魅力的であると判断した場合には、為替リスクをコントロールしながら海外資産への投資も実施しています。
- 不動産への投資および事業投資においては、ペット保険および動物医療における知見に基づき、シナジー効果の期待できる案件に選別投資を実施しています。

強み

- 不動産運用では、「人とどうぶつが共生する持続可能な社会の実現」をコンセプトに、付加価値の高いペット共生賃貸住宅の開発、社会貢献活動に関わる施設を提供しています。
- ペット保険における実績データやどうぶつ医療に関わる豊富な経験と人材を活かしてペット医療あるいはペットと暮らす人々にシナジー効果のある共同事業に出資しています。

課題

- 資産運用においても2025年の新SMRへの移行後のリスク管理方針に基づくリスク量の管理を行う必要があり、資産運用におけるリスク管理態勢の強化を図っています。財務健全性を維持しつつ、RORの観点から適切な水準のリスクを取った資産運用を目指します。

取組み

- ペットと飼い主のより良い部屋探しのサポート、ペット共生型住宅の普及を目指し、不動産情報アプリ「カナリー(CANARY)」の運営等を行う株式会社カナリーと資本業務提携を締結しました。
- 動物愛護・譲渡施設「ani TERRACE」にて老犬ホームの運営を開始しています。
- 産学連携を行っている石川県の国際ビジネス学院内に保有するドッグカフェ、ドッグラン等併設の動物愛護複合施設「しっぽの郷」は、ペット業界の未来を担う人材育成・学校教育の場として活用されているほか、能登半島地震で被災したペットの受け入れも実施しています。
- ペット共生住宅「アニコフロア東中野」は好評にて満室稼働中となっています。